

時制と談話構造 — 同時性を表さない半過去再考
 Temps verbaux et organisation du discours — une autre vue
 sur l'imparfait ne dénotant pas la simultanéité

東 郷 雄 二 (Tôgô Yûji)

Cet article se propose de remettre en revue les emplois de l'imparfait qui ne dénote pas la simultanéité avec un autre événement décrit dans l'environnement textuel avoisinant. Nous regroupons ces emplois en trois catégories. Dans la première catégorie entrent des emplois tels que Il était tout différent du garçon qu'il était trois mois auparavant. En développant l'analyse avancée dans Tôgô (2007) selon laquelle le système temporel du français se compose de deux zones, nous considérons cet emploi comme imparfait de discours incrusté dans du récit. Pour ce faire, nous mettons en lumière le mécanisme de la concordance des temps dans le discours et essayons d'expliquer pourquoi l'imparfait n'est pas sujet à la règle de la concordance des temps, s'il y en a. La deuxième catégorie correspond à des emplois tels que Il mourut à l'âge de 50 ans. Il fumait deux paquets de cigarettes par jour. Bien qu'il apparaisse dans une phrase indépendante à la différence du premier emploi, nous pensons pouvoir analyser cet emploi de la même manière que le premier. Enfin, la troisième catégorie est représentée par un exemple tel que Jean tourna le robinet. L'eau jaillissait. A la différence des deux premiers emplois, cet imparfait dénote un point temporel postérieur à un autre événement. Nous croyons qu'on a là un emploi ordinaire de l'imparfait de récit ; seulement le point de référence R avance à la suite de l'événement décrit par la première phrase. Pour que cet emploi passe la barre, il faut qu'il y ait un sujet (explicite ou implicite) porteur du point de vue.

キーワード：半過去 (imparfait), 時制の一致 (concordance des temps), 同時性 (simultanéité), 視点 (point de vue), 談話 (discours)

1. はじめに

従来の多くの研究において、半過去は a) 過去時制であり、b) 未完了時制であり、c) 単純過去や時間副詞が設定する基準点 R を必要とし R との同時性を表すと考えられてきた。その一方で、半過去の同時性を否定する意見もある。その代表は Sten (1952) と Le Bidois & Le Bidois (1935-38) である。確かに次の例では半過去が同時性を表すとは考えられない。

- (1) Hier ils nous *faisaient* la causette, à présent ils se cachent. (Sten 1952)
- (2) Et cette femme, en qui on ne pouvait reconnaître celle qui une heure auparavant *pleurait* avec Mahaut d'Orgel... (Ibid.)
- (3) Naguères Stamboul *s'appelait* Constantinople. (Le Bidois & Le Bidois 1935-38)
- (4) Les Romains *étaient* un peuple superstitieux. (Ibid.)

この問題をめぐる議論で注目には値するのは阿部 (1987) である。阿部は半過去がさまざまな時制との組み合わせで用いられる例を多数挙げて、同時性を表さないことがあることを説

得的に例証している。

- (5) a. [半過去と] *Shinji était maintenant tout à fait différent du garçon qu'il était trois mois auparavant.*
- b. [単純過去と] *Puis il (=le gouvernement autrichien) enleva à la Hongrie la large autonomie dont elle jouissait avant 1848.*
- c. [大過去と] *La dynamo qui était en panne depuis longtemps avait été réparée.*
- d. [想像上の未来としての条件法過去と] *Heureuse et riche, tu aurais oublié, oui, j'en suis sûr, tu aurais oublié ce que je suis, ou plutôt ce que j'étais.*

阿部のキーワードは「場面転換」である。(5) a. を例に取ると、従属節の *Shinji* と主節の *Shinji* の間には 3 ヶ月の隔たりがあり場面転換がある。このため本来は終了時点を持たない半過去の表す事態が、主節時点で終了したものと理解されると阿部は説明している。

本稿では次の 3 つのタイプに分けてこの問題を考えてみたい。

- (6) 同時性を表さない半過去 (1): 従属節や関係節・比較節に生じ、主節の時制よりも過去を表す。ex. *Il n'était plus le garçon qu'il était trois mois auparavant.*
- (7) 同時性を表さない半過去 (2): タイプ (1) と同じく他の時制よりも過去を表すが、(1) と異なり独立文に生じる。ex. *Il mourut à l'âge de 50 ans. Il fumait deux paquets de cigarettes par jour.* (Irandoost 1998)
- (8) 同時性を表さない半過去 (3): 他の時制よりも未来を表し時間を進める。ex. *Jean tourna l'interrupteur. La lumière éclatante l'éblouissait.* (Kamp & Rohrer 1983)

2. 同時性を表さない半過去(1)

2.1. 時制の全体像と *récit* の半過去 / *discours* の半過去

筆者は東郷 (2007) で次のようなフランス語時制の全体像を提示した。

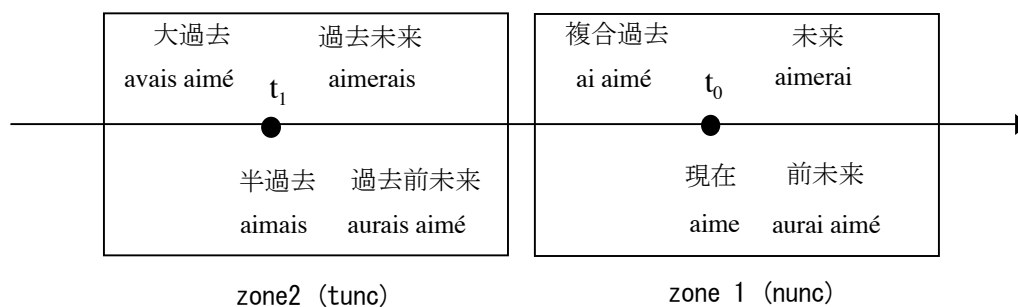


Fig.1

直説法の時制は、発話時現在 t_0 に視点を置いて把握した事態を表す zone 1 の時制と、過去時 t_1 に視点を置いて捉えた事態を表す zone 2 の時制に分かれる。単純過去と前過去はこの図式には入らないが、その理由は東郷 (2010) で述べたのでここでは繰り返さない。

Fig. 1 で重要なのは、zone 1 と zone 2 の両方が発動されるためには、両者の「断絶」が必要だという点である。断絶とは過去と現在が異なっているという事態認識を意味する。もし断絶がなければ過去と現在は連続した時間と意識される。このとき *J'habite à Paris depuis cinq ans.* や *Vous avez toujours été gentil avec moi.* のように zone 1 の時制が用いられ zone 2 の時制は用いられない。この「断絶」は阿部 (1987) の言う「場面転換」や西村 (1985) の言う「不

連続」と同じ概念であり、東郷 (2007) はこれらの研究に多くを負っている。ただし「場面転換」や「不連続」という概念はそれだけでは不十分であり、Fig.1 が表す時制の全体像に位置づけて初めて意味を持つと考える。

東郷 (2007) では *récit* の半過去と *discours* の半過去を区別する Le Guern (1986) の提案を支持し、両者のちがいを Fig. 1 に基づいて説明することを試みた。Paul entra dans la cuisine. Marie faisait du café. のような *récit* の半過去では、zone 1 は背景化され zone 2 のみが発動される。話し手は過去の時点 t_1 (= entra) に視点を置いて捉えた事態を述べ、半過去は基準点 R との同時性を表す。一方、Je t'attendais. のような *discours* の半過去では zone 1 と zone 2 の両方が発動され断絶が両者を分かち、話し手は t_0 に視点を置き、過去を振り返って zone 2 で成立していた事態を述べる。このとき基準点 R は存在せず半過去は同時性を表さない。

Sten (1952) , Le Bidois & Le Bidois (1935-38) , 阿部 (1987) の挙げる例は、すべて *discours* の半過去である。 *discours* の半過去が同時性を表さないことを根拠に、同時性を半過去の特性であることを全面的に否定する議論は的はずれである。同時性の不在は *discours* の半過去にのみ当てはまることで、 *récit* の半過去では同時性は成り立っているのみならず、半過去の使用に必要な要件となっているからである。

では半過去にはその時制としての価値が根本的に異なる 2 種類があると考えられるべきなのだろうか。筆者はそうは考えない。 zone 2 の中核をなす未完了時制であるという半過去の性質は、 *récit* の半過去においても *discours* の半過去においても共通している。ただ話し手が談話を構築する際に、どのような談話的機序を発動させるかによって両者が異なった振る舞いをする。筆者は時制は本質的に談話的現象であり、時制の問題の解明には談話構築の機序を考慮することが不可欠だという立場を採る。

2.2. *discours* の半過去における時制の一致

同時性を表さない半過去(1)タイプの Il n'était plus le garçon qu'il était trois mois auparavant. で、1つ目の était と 2つ目の était が同じ時点を表さないのに、なぜ同じ半過去が用いられるのだろうか。以下でこの問題を考察するが、そのためにはまず従属節における時制の一致の問題を考えなくてはならない。時制の一致は各々の時制がばらばらに起こす現象ではなく、zone 1 から zone 2 への話し手の視点移動の結果生じるものである。発話時現在 t_0 に視点を置いていた話し手が、過去時 t_1 に視点を移動したとき、時制の一致が起きる。Fig. 1 の zone 1 と zone 2 を重ねたときに、上下重なる時制が互いに一致の関係に立つ。

ところで半過去は次例のように時制の一致を起ささないが、その理由は Fig.1 の時制の全体像を考慮することで初めて説明できる。

- (9) a. Il n'est plus le garçon qu'il était il y a trois mois.
 b. Il n'était plus le garçon qu'il était trois mois auparavant.

discours の半過去では時制の一致は次のメカニズムに支配されていると考えられる。

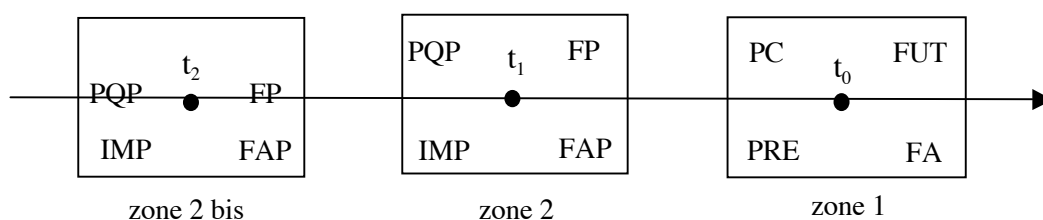
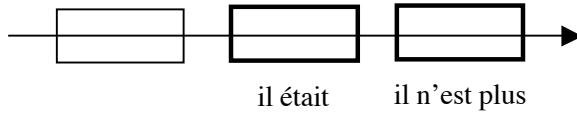


Fig.2
3

略号：PRE=présent, PC=passé composé, FUT=futur, FA=futur antérieur, IMP=imparfait,
PQP=plus-que-parfait, FP=futur du passé, FAP=futur antérieur du passé

現在形と半過去の対比がある discours の半過去 (10) では, zone 1 と zone 2 が発動される.
以下の図は Fig.2 を模式的に表示したもので, 発動される zone を太線で示してある.

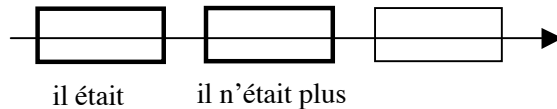
(10) Il n'est plus le garçon qu'il *était* il y a trois mois.



このとき従属節の半過去は発話時視点に基づく絶対時制である.

では(10)を過去にずらすと従属節の時制の一致はどうか. 主節の Il n'est plus は過去方向にずらされ, il n'était plus と半過去になって zone 2 に入る. すると従属節の il était も同じように過去方向にずらすなくてはならない. ところが元の時制図式 Fig.1 を見てもわかるように, zone 2 の左側にはもう zone がないので, これ以上過去方向にずらすことはできない. そこで Fig.2 で示したように zone 2 が丸ごと左側にコピーされると考えたい. これを zone 2 bis と呼ぶ. 図を見てわかるように, zone 2 と zone 2 bis の時制はまったく同じである. これに基づいて時制の一致を考えると次のようになる.

(11) Il n'était plus le garçon qu'il *était* trois mois auparavant.



(10)の従属節の *était* が zone 2 から zone 2 bis に移動しても語形は *était* のまま留まる. このとき従属節の半過去 *était* は主節時視点に基づく相対時制として働く. (10)のように絶対時制としても, (11)のように相対時制としても働くことが半過去の大きな特徴である. このように考えれば「半過去は時制の一致を起こさない」という言い方は厳密に言えば正しくなく, 「半過去は時制の一致を起こしても形は同じである」という方が適切になる. 同様に大過去, 過去未来, 過去前未来も時制の一致を起こさないと予測できる.

2.3. récit に埋め込まれた discours の半過去

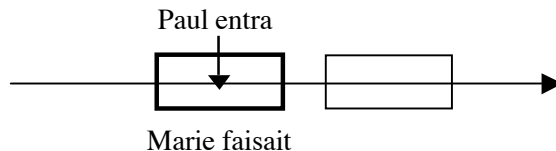
東郷 (2007) では Je t'attendais.のような discours の半過去では, zone 1 と zone 2 の両方が発動され, 話し手は発話時現在に視点を置いて zone 2 で成立していた事態を捉えると分析した. このことは(10)にも当てはまるので, この例は阿部 (1987) が正しく指摘したように discours の半過去である. ではこれを過去にずらした (11)はどう考えるべきだろうか. 阿部の例 (5) b. Puis il enleva à la Hongrie la large autonomie dont elle jouissait avant 1848.では récit の時制である単純過去が用いられていることからわかるように, テキストの基調は récit である. しかし récit の途中で zone 2 の時点 t_1 に視点を置いて, さらに過去の zone 2 bis を回顧するという事態の把握は, zone 1 から zone 2 を振り返る把握と基本的に相同である. 視点位置が現在から過去にずらされたにすぎない. このため本稿では (11) や(5) b. の例は récit に埋め込まれた discours の半過去と分析すべきだと考える.

これはいささかも突飛な発想ではない. 物語のように登場人物のあるテキストでは, 語り

手がしばしば登場人物の視点を借りて物語を構築することはよく知られている (Genette 1972). したがって話し手が現在に視点を置いて過去を回顧するのと同じように、過去として語られた物語の中で登場人物に視点を置いて過去 (= 過去の過去) を回顧することがあるのは当然である. そのとき Fig. 2 が示す時制の一致の機序が働くと本稿では主張したい.

ここでは理解を助けるため補足として *récit* の半過去の図式に手短かに触れておく. 次がいわゆる同時性を表す *récit* の半過去である.

(12) Paul entra dans la cuisine. Marie *faisait* du café.



récit の半過去では zone 2 のみが発動され zone 1 は背景化される. 背景化とは, 時制を支える認知的図式に存在し続けるものの, 一時的に無効化され考慮されなくなることをいう. このとき半過去は発話時視点に基づく絶対時制ではなく, 他の時制 (= *entra*) が設定する視点を基準とする相対時制として働く. *récit* の半過去も従属節での時制の一致現象については, *discours* の半過去と同様の振る舞いをすると考えられる¹⁾.

同時性を表さない半過去 (1) の特徴は, ここまでで挙げた例から明らかのように, もっぱら比較節や関係節などの従属節で用いられるという点にある. その理由は次のように考えられる. *Il n'était plus le garçon qu'il était trois mois auparavant.* のように異なる時点に同一の半過去という時制形式が当てられているとき, 両者の間に明確な対比・対立関係がないと, 同じ時点を表すと解釈されてしまう危険性がある. 関係節・比較節はこの対比・対立を提供する理想的な統語環境である. だからこのタイプの半過去はもっぱら関係節や比較節で用いられるのである. それ以外の環境で出現するためには, *un jour ... le lendemain, maintenant ... autrefois* のように時間的懸隔, すなわち zone 1 と zone 2 の断絶を明示する時間副詞が必要となる.

(13) a. *Un jour, il y avait une armée, le lendemain, il n'y avait plus rien.* (Sten 1952)

b. *Il avait maintenant un ventre d'homme qui dîne bien. Autrefois il était mince et souple.*

3. 同時性を表さない半過去 (2)

3.1. もうひとつの *récit* に埋め込まれた *discours* の半過去

では次のタイプの考察に移ろう. タイプ (2) はタイプ (1) と同様に他の時制よりも過去を表すが, タイプ(1)と異なり独立文に生じ, 時間的懸隔を強調する副詞もない.

(14) a. *Il mourut à l'âge de 50 ans. Il fumait deux paquets de cigarettes par jour.*

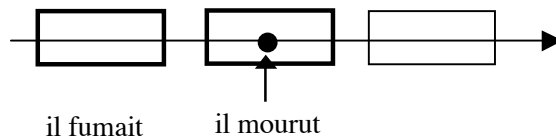
b. *On congédia Jean. Cela n'étonna personne. Jean n'exerçait pas ses fonctions à la satisfaction générale.* (Molendijk 1993)

c. *Le grand-vizir mourut à l'âge de 88 ans. C'était un homme très sage qui donnait toute satisfaction.* (Vet & Molendijk 1985)

このタイプはときに「説明の半過去」(*imparfait d'explication*) と呼ばれることもある. 日本語に訳すと多くは「~のだ」となることが観察される. 本稿ではこのタイプの半過去もタイ

プ(1)と同様に *récit* に埋め込まれた *discours* の半過去だと考える。すなわち過去の時点 t_1 に視点を置き、それとは断絶した *zone 2 bis* において成立していた事態を表している。この「断絶」は(14) a.では彼の死亡、(14) b.では Jean の解雇、(14) c.では太守の死亡という出来事が談話内に作り出していると考えられる。

(15) Il mourut à l'âge de 50 ans. Il *fumait* deux paquets de cigarettes par jour.



過去の時点 t_1 に視点を置いてさらに過去の *zone* において成立していた事態を捉えることが、現在の事態に対する理由付けとなることから説明という意味効果が出る。しかし、説明という意味効果は半過去自体に内在するものではなく、「過去の出来事が現在の事態の原因となる」という語用論的推論に基づくものである。その証拠に2つの *zone* の関係は常に原因・理由となるわけではなく、2つの事態の対比となることもある。

(16) Max a rompu avec Marie. Ils *s'entendaient* pourtant si bien.

さて、ここで次のような例を根拠として、このタイプの半過去でもやはり同時性が成り立っているのではないかという反論が予想される。

(17) Il s'arrêta brusquement : Eve l'*écoutait* à peine. (Sartre, *La Chambre*)

「彼」が話をやめた時点において「エヴが上の空で聞いていない」という事態は継続中であり、その後も継続することがありうる解釈できるからである。しかしこの例に基づく反論は有効ではない。なぜならここには、*zone 2 bis* の「彼が話をし、エヴが聞いていない」という状況と、*zone 2* の「エヴが聞いていないので彼が話をやめた」という状況のあいだに断絶があるからである。したがってこの例も同時性を表さない *récit* に埋め込まれた *discours* の半過去と見なすべきである。

3.2. メルセデスのアポリア

以上述べたことを踏まえて、半過去をめぐる議論でよく知られている次の例を考察してみよう。

(18) Jean se mit en route dans sa nouvelle Mercedes. Il attrapa une contravention. Il *roulait* trop vite.
(Berthonneau & Kleiber 1993)

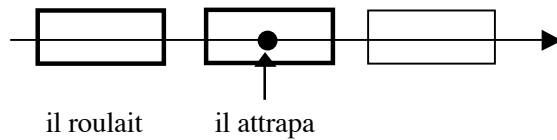
東郷 (2008) でこの例を論じた時には、半過去 *roulait* は直前の Il attrapa une contravention. という出来事を含むより大きな状況の一部を成すと主張した。その主張を導く前提として *roulait* は *attrapa* と同時性を表すということを認めていた。しかし本稿では東郷 (2008) で示した分析を撤回し、(18)は本節で考察の対象としている「同時性を表さない半過去のタイプ (2)」であると考えたい。

こう考える理由はここにも「断絶」があるからである。Il *roulait* trop vite. の「彼がスピードを出して運転している」状況と Il attrapa une contravention. の「停止を命じられ違反切符を切られている」状況のあいだには断絶があり連続していない。同時性を表す *récit* の半過去 Il regarda le jardin par la fenêtre. Il *neigeait*. と比較すればよくわかるだろう。この文の表す「彼が窓から庭を見ている」状況と「雪が降っている」状況には断絶はない。ふたつの状況は部分

的にオーバーラップしている。この状況のオーバーラップが同時性に不可欠の条件であるが、(18)にはそれがない。ちなみに *attrapa* と *roulait* が同時ではないとする見解は決して突飛なものではなく、Molendijk (1990), Gosselin (1996)にも見られる²⁾。

本稿では (18) は次の模式図のように分析するべきだと考える。

(19) *Il attrapa une contravention. Il roulait trop vite.*



話し手は過去の時点 t_1 (= *il attrapa*) に視点を移動して、それより過去の *zone 2 bis* において成立していた事態 (= *il roulait*) を回顧的に把握する。*il attrapa* が置かれている *zone 2* と *il roulait* がある *zone 2 bis* の断絶は、「違反切符を切られた」という事態が言外に意味している「警官に停止を命じられた」という出来事が生み出したものである。日本語に訳すと「彼はスピードを出しすぎていたのだ」のように、理由を表す「のだ」が現れることもこの分析の傍証となるだろう。

またこの例を現在のこととして書き換えてみると、本稿の分析が妥当であることがわかる。次の作例は警官が違反切符を渡しながらか発話していると考えていただきたい。

(20) *Je vous donne une contravention. Vous { rouliez / *roulez } trop vite.*

書き換えると問題の部分は半過去 *rouliez* となり、現在形 *roulez* は不適格である。スピード違反をしたドライバーはすでに停止しているのだから、現在形が使えないのは当然である³⁾。今までの考察から (20) の半過去が *discours* の半過去なのは明らかである。主語や文型は多少異なるものの、(19)を(20)が過去にずらされたものと仮定すると、(20)の半過去 *rouliez* が(19)では時制の一致の結果、半過去 *roulait* になっていると考えられる。このように(18)は「*récit* に埋め込まれた *discours* の半過去」と見なすのが最も妥当な分析だと思われる⁴⁾。

また本節で示した分析は以下の問題もうまく解決してくれる。Molendijk (1996) は Berthonneau & Kleiber (1993) の部分照応説を批判し(21)を挙げている。(21)では *il brûlait* と *il attrapa* のあいだに部分照応の十分条件である部分・全体関係が成り立っているにもかかわらず半過去が容認されない、だから部分照応説はまちがっているというのである。

(21) *Jean se mit en route dans sa nouvelle Mercedes. Il attrapa une contravention. *Il brûlait un feu rouge.*

しかし Molendijk の批判は的外れである。この半過去の容認度が低いのは *brûler un feu rouge* の内的アスペクトが半過去の使用に適していないためである。次のような作例を考えればそのことがわかる。(20)と同じく違反切符を切る警官の発話と考えていただきたい。

(22) *Je vous donne une contravention. Vous { avez brûlé / *brûliez } un feu rouge.*

この場合は(20)と異なり半過去ではなく複合過去が適切な時制である。その理由は次のように考えられる。*rouler* のような活動動詞は単調継続の内的アスペクトを持つため、その一部が実現されれば事態は成立したと認定される。このため終点を持たない半過去のような未完了時制に置かれても事態の成立を意味する。だから制限速度を超えて少しの距離でも走れば、違反切符を切る十分な理由となる。一方 *brûler un feu* のような達成動詞は、終点に到ら

なくては事態が成立したと認定されない。brûler un feu を半過去に置くと、その内的アスペクトにかかわらず時制価値が優先され、事態は未完了であり終点に至っていないと解釈される。「赤信号を無視した」と認定するには、事態が終点に達していないなくてはならない。このため(22)では完了時制である複合過去に置かなくてはならないのである⁵⁾。

Fig.2の zone 2 bis において成立が確認される事態とは、zone 2の時点 t_1 に視点を置いて zone 2 bis を振り返ったとき、zone 2 bis の時点 t_2 において成立が確認できる事態でなくてはならない。一般にある時点 t において成立が確認できる事態とは、 t において状態として成り立つ事態か、 t より過去に起きた事態のいずれかである。zone 2 bis では前者の場合は半過去が、後者の場合は大過去がこれを表す。大過去を考慮から外すと、(21)で許容されるのは時点 t_1 において「状態」としてその成立が確認できる事態、すなわち非完結的 (atelic) なアスペクトを持つものでなくてはならない。brûler un feu は完結的 (telic) であり、この条件を満たしていない⁶⁾。

ちなみに「récit に埋め込まれた discours の大過去」の例として次を挙げることができる。

(23) Elle se trouvait heureuse. La douceur du milieu avait fondu sa tristesse.

(Flaubert, *Cœur simple*)

この例を引いた朝倉 (1955)は「この大過去は説明・原因を表す」と説いている。この大過去が説明・原因を表すのは、まさにこれが「récit に埋め込まれた discours の大過去」であるからに他ならない。

次の半過去の不適格性も(22)と同様に説明できる。

(24) L'édifice s'écroula. *La bombe explosait. (Tasmowski-De Ryck & De Mulder 1998)

Berthonneau & Kleiber (1993)の部分照応としての半過去 (imparfait méronomique)は興味深い仮説ではあるが、récit の半過去については成り立っても、discours の半過去には成り立たないと結論づけなくてはならない。

4. 同時性を表さない半過去 (3)

では3つ目のタイプに話を進める。これは今までと異なり時間が前に進む半過去である。

(25) a. Jean tourna l'interrupteur. La lumière éclatante l'éblouissait. (Kamp & Rohrer 1983)

b. Le juge alluma une cigarette. La fièvre donnait au tabac un goût de fiel. Il écrasa la cigarette⁷⁾. (Vailland, La loi, cité dans J.-Cl.Chevalier et al. 1964)

c. Il dessina donc un cercle autour de lui avec un grand bâton, respira trois fois profondément et lut une des formules magiques du livre. Bientôt, à la place du petit garçon, il y avait un vieil homme à longue barbe. (R. Graves, Le grand livre vert, cité dans Moeschler 1996)

d. Je ... dit-il, tout contre son oreille, et à ce moment, comme par erreur, elle tourna la tête et Colin lui embrassait les lèvres. Ça ne dura pas très longtemps ; mais la fois d'après, c'était beaucoup mieux. (B. Vian, L'Écume des jours , cité dans 赤羽 2006, Bres 2005)

(25) a.の例を挙げた Kamp & Rohrer (1983)は、単純過去は新たな出来事を談話に導入し時間を前に進めるが、半過去は他の出来事との同時性を表し、時間を前に進めないとし、このことを半過去に内在する特性とした。にもかかわらず(25) a.で半過去が時間を進めるのは、そ

の前の文の動詞 *tourner l'interrupteur* が状態変化述語で、その実現が新たな状態の出現を意味するため、半過去が表す状態の設定が保証されるからだと述べている。

しかし Kamp & Rohrer (1983) の分析に問題があることは多くの研究で指摘されてきた。次の例の *tomber de la falaise, tomber raide mort* は *tourner l'interrupteur* と同じく状態変化述語であり、結果状態が生じることを含意するが、(25)とは異なり半過去を用いることはできない。

(26) a. Paul tomba de la falaise. On le {*ramassa / *ramassait*} avec les deux jambes fracturées.

(Berthonneau & Kleiber 1993)

b. Jean tomba raide mort. *Sa femme *appelait* à l'aide. (Tasmowski-De Ryck 1985)

この問題については次のように考えたい。(25)では確かに時間が前に進んでいる。本稿では Kamp & Rohrer (1983) の分析を支持し、この半過去は状態変化述語によって結果状態の出現が含意されることによって、時間が前に進んだ暗黙の基準点 R との同時性を表す *récit* の半過去だと考える。つまり(25)はふつうの同時性を表す *récit* の半過去なのだが、基準点 R が暗黙のうちに未来方向にずらされていると考えるのである。したがって半過去自体が時間を進めたのではない。半過去にはそのような機能はなく、多くの研究が指摘するように非自立的時制である。

本稿は時制は優れて談話的現象であるという立場に立脚している。(25)の半過去を正しく理解するためには、談話構築の機序、なかんずく語りにおける視点の問題を考慮しなくてはならない。(25)の半過去はいわゆる内的描写の半過去であり、視点主体が状況の内部に包み込まれ、状況を内側から描写しているとされる。このような内的描写が成り立つためには、状況の内部に事態と関連を持つ視点主体がなくてはならない。(25) a. では明かりを眩しく感じた Jean が明示的に表現されており、これが視点主体として働く。(25) b. では煙草を苦く感じた判事が視点主体である。(25) c. では明示的な主体は設定されていないが、Genette (1972) の言う内的焦点化 (*focalisation interne*) によって、談話内に状況を観察している潜在的主体が生じていると見なすことができる。(25) d. では Colin が視点主体だと見ることもできるし、(25) c. と同じように潜在的主体を想定することも可能である。このような立場に立てば (25) a. を図式的に次のように表すことができる。

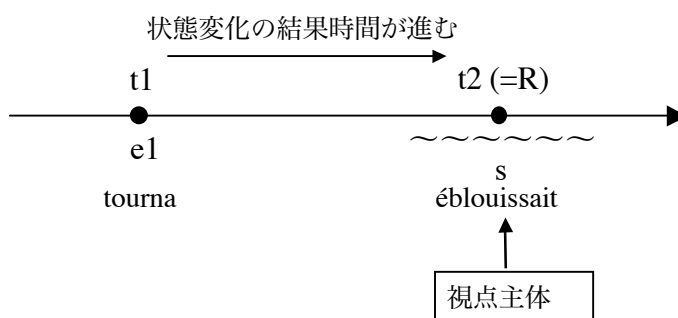


Fig. 3

(25) a. では「眩しさ」という視覚、(25) b. では「タバコの味」という味覚、(25) c. では視覚による老人の存在知覚、(25) d. では「キスする」という身体接触というように、これらの例では感覚に訴える描写が行われていることが視点主体の想定を容易にしていることも見逃してはならない。

では (26) の半過去はなぜ容認度が低いのだろうか。それは半過去の内的描写に必要な視

点主体が十分に談話的に確立されていないからである。(26) a.の第1文で登場しているのは Jean のみである。ところが第2文は Jean の視点から描かれておらず、視点の主体となるべき人物がない。主語 on は視点主体となるには意味量が不足している。また on le ramassait が行為を述べており、知覚の描写とは関係のない内容であることも容認度の低さの原因となっている。同じことは (26) b.にも言える。Sa femme appelait à l'aide. は単に sa femme の行為を述べているに過ぎず、sa femme に視点を置いて眺めた事態を表していない。かといって潜在的視点主体を想定を可能にするような場面の具体的描写が行われているわけでもない。これが半過去の容認度が低い理由である。

Bres (2005) は本稿と同じくこれらの例に視点主体 (Sthioul の用語では *sujet de conscience*) を認める Sthioul (1998)を批判して、(26) b. では Paul が死んでしまったので視点主体になれないから容認度が低いと説明するのなら、(27)のように変えたら Paul は死んでいないので視点主体になれるはずだが容認度は改善されない、だから視点主体説はまちがっていると主張している。

(27) ?Paul tomba et se cassa la jambe. Sa femme appelait à l'aide.

しかし Bres (2005) の批判は的外れと言わざるをえない。第1文の主語が死んでいるかどうかは関係ない。第1文と第2文とが全体として構築する談話の世界内に視点主体の候補があり、かつ第2文の内容が視点主体が感覚によって知覚した内容になっているかどうかの問題なのである。(26) b. を(27)に変えても sa femme は単なる行為者であり視点主体と解釈しにくいことに変わりはない。

談話内に潜在的な視点主体が設定されると半過去の容認度が上がることは、今までの研究でも指摘されている (Tasmowski 1985, Sthioul 1998)。

(28) Elle s'arrêta un instant. Elle consulta un petit carnet de notes, leva la tête, regarda et continua son trajet. Arrivée à la dernière rangée, elle s'engagea sur l'herbe mouillée ?Elle se penchait sur chaque croix et lisait les noms. (Tasmowski 1985)

se penchait と lisait の半過去はこのままでは容認度が低い。しかし Tasmowski (1985) は最後に John la surveillait.を付け加えると、これらの半過去の容認度が向上すると述べている。se penchait と lisait の半過去が描く状況を観察している視点主体として John が働くからである⁸⁾。

5. おわりに

本稿では同時性を表さないとされる半過去の用法を3種類に分けてそのメカニズムを解明した。タイプ(1)は関係節や比較節に生じる *discours* の半過去で、主節時視点に基づく相対時制として働く。これは *récit* に埋め込まれた *discours* の半過去であり、この用法を支えているのはふたつの *zone* の断絶である。タイプ(2)は独立節に生じる点で、タイプ(1)と統語的環境は異なるが、同じく *récit* に埋め込まれた *discours* の半過去と見なすことができる。最後にタイプ(3)は時間が前に進んでいるという点で今までのタイプと異なり、またこれは同時性を表す *récit* の半過去と見なすべきである。この分析を支えているのは Fig. 1 に示した時制の全体像と、Fig. 2 に示した *discours* における時制の一致のメカニズムであり、またタイプ(3)の分析にはテキスト全体にかかわる談話構築の機序、とりわけ視点の問題を考慮すること

【注】

- 1) *récit* の位相での従属節における時制の一致には考察すべき問題が残されているが、本稿の論旨には直接関係しないのでここまでに留める。
- 2) ただし Molendijk は *roulait* は *Jean se mit en route* と同時だと主張している点で本稿の見解とは異なる。
- 3) *Vous roulez trop vite.* には「いつもスピードを出しすぎる」という習慣的解釈が可能だが、交通違反は現行犯なので、この解釈は違反切符を切る理由にならない。ただし、切符を切った後で警官が「いつもスピードを出しすぎるね」と感想として述べることは考えられる。
- 4) Berthonneau & Kleiber (1993) では (18)の最後の文を ?*Il roulait avec plaisir.* とすると容認度が下がることが部分照応説の根拠のひとつとされている。Berthonneau & Kleiber (1999)ではこれを *Il roulait pourtant avec plaisir.* と変えると容認度が向上することを指摘している。*pourtant* を付加すると *zone 2* と *zone 2 bis* のあいだの対立・対比が強調され *discours* の半過去として解釈しやすくなることがその理由であろう。
- 5) *Vous brûliez un feu rouge.* には「赤信号を無視しようとした」という中断の解釈が可能だが、ここではこの解釈は考慮しない。赤信号を無視しようとしただけでは違反の対象にならない。
- 6) この箇所の考察に対して、査読委員の一人から次のような意見が寄せられた。説明の半過去では、事態そのものが直接過去に位置づけられるのではなく、理由や説明として捉え直されてから位置づけられる。この概念化過程においては、動詞の内的アスペクトではなく叙想性・情報性の方が重要となる。したがって内的アスペクトによる説明は適切を欠くのではないかという意見である。確かに半過去の叙想性は今後考察を要する課題である。しかし(22)(24)が示しているように、叙想的だからといってどんな動詞でも半過去に置くことができるわけではない。本稿では物理的因果関係が明白な場合は事態の成立認定が必要であり、そのとき動詞の内的アスペクトが関係すると考える。
- 7) J.-Cl.Chevalier et al. (1964)の原文では *un goût de miel* となっているが、Sthioul (1998)が指摘しているように *un goût de fiel* (胆汁)の誤りらしい。
- 8) (25) d.の例を引いた赤羽 (2006) はこの半過去について、登場人物たちが望んでいたキスという夢のような世界に一挙に身を置いており、ここには飛躍と断絶があると述べている。*tourner la tête* という述語は「キスしている」という結果状態を含意しないにもかかわらず、「キスしている」という状態にいきなり視点主体が置かれることによる意味効果だと考えられる。

【参考文献】

- Berthonneau, A.-M. & G. Kleiber (1993), “Pour une nouvelle approche de l'imparfait : l'imparfait, un temps anaphorique méronomique”, *Langages* 112, 55-73.
- Berthonneau, A.- M. & G. Kleiber (1999), “Pour une réanalyse de l'imparfait de rupture dans le cadre de l'hypothèse anaphorique méronomique”, *Cahiers de praxématique* 32, 119-166.
- Bres, J. (2005), *L'imparfait dit narratif*, CNRS Editions.

- Chevalier, J.-Cl. et al. (1964), *Grammaire Larousse du français contemporain*, Larousse.
- Genette, G. (1972), *Figures III*, Editions du Seuil.
- Gosselin, L. (1996), *Sémantique de la temporalité en français*, Duculot.
- Irlandoust, H. (1998), “Reference frames - an application to imparfait”, Koenig, J.P. (ed) *Discourse and Cognition*, CSLI, 309-322.
- Kamp, H. & C. Rohrer (1983), “Tense in texts”, Bauerle, R.R. et al. (eds) *Meaning, Use, and Interpretation of Language*, De Gruyter, 251-269.
- Le Bidois, R. & G. Le Bidois (1935-38), *Syntaxe du français moderne*, Editions A. et J. Picard et C^{ie}.
- Le Guern, M. (1986), “Notes sur le verbe français”, Rémi-Giraud, S. et al. (eds) *Sur le verbe*, Presses Universitaires de Lyon, 9-60.
- Moeschler, J. (1996), “Time in evolving reference”, ms.
- Molendijk, A. (1990), *Le passé simple et l'imparfait : une approche reichenbachienne*, Rodopi.
- Molendijk, A. (1993), “Présupposition, implications, structure temporelle”, Vetters, C. (ed) *Le temps, de la phrase au texte*, Presses Universitaires de Lille, 167-192.
- Molendijk, A. (1996), “Anaphore et imparfait : la référence globale à des situations présupposées ou impliquées”, De Mulder, W. et al. (eds) *Anaphores temporelles et (in-)cohérence*, Cahiers Chronos 1, Rodopi, 109-124.
- Sten, H. (1952), *Les temps du verbe fini (indicatif) en français moderne*, Ejnar Munksgaard.
- Sthioul, B. (1998), “Temps verbaux et point de vue. Le temps des événements”, Moeschler, J. (ed) *Pragmatique de la référence temporelle*, Kimé, 197-220.
- Tasmowski, L. (1985), “L'imparfait avec et sans rupture”, *Langue française* 67, 59-77.
- Tasmowski-De Ryck, L. & C. Vetters (1996), “Morphèmes de temps et déterminants”, De Mulder, W. et al. (eds) *Anaphores temporelles et (in-)cohérence*, Cahiers Chronos 1, Rodopi, 125-146.
- Tasmowski-De Ryck, L. & W. De Mulder (1998), “L'imparfait est-il un temps méronomique ?”, Vogeleer, S. et al. (eds) *Temps et discours*, Peeter Lang, 171-190.
- Vet, C. & A. Molendijk (1985), “The discourse function of the past tense of French”, Lo Casio, V. et al. (eds) *Temporal Structure in Sentence and Discourse*, Foris, 133-160.
- 朝倉季雄 (1955) 『フランス文法事典』 白水社.
- 赤羽研三 (2006) 「語りの流れと切断」『仏語・仏文学論集』 41 (上智大学), 123-147.
- 阿部 宏 (1987) 「フランス語の半過去について」『フランス文学語学研究』 6 (早稲田大学), 31-41.
- 東郷雄二 (2007) 「Je t'attendais.型の半過去再考」『フランス語学研究』 41, 1-15.
- 東郷雄二 (2008) 「半過去の照応的性格 — 連想照応と不完全定名詞句の意味解釈から」『フランス語学研究』 42, 17-30.
- 東郷雄二 (2010) 「談話情報管理から見た時制 — 単純過去と半過去」『フランス語学研究』 44, 15-32.
- 西村牧夫 (1985) 「現在にかかわる大過去」, 東京外国語大学グループ《セメイオン》編『フランス語学の諸問題』, 50-62.